

女子学生服装今昔

貝山久子

“この学生さんもずい分派手になりましたねエ、と安藤先生が感にたえぬようにおっしゃる。安藤先生は東大の先生で、先日結婚なさった長男の春樹さんが小学生のころからかれこれ20年も経済学を教えに来て下さっている方である。何でも一般教育棟でホットパンツの学生をお見かけになったとか。以下その学生のでたちの説明は陣羽織のような上衣と頭陀袋のようなバッグということで、戦前派・戦中派の二人は大いに理解し合ったことであつたが、戦後の推移しかご存知ない安藤先生にして然りだから、女高師時代を体験している私などは、正に今昔の感にたえない思いがする。

立教や青山の女子学生に較べればお茶の水の学生は地味だといわれるが、それでもミニは定着した感じだし、ミディもマキシもパンタロンもホットパンツもためらわずとり入れて、世間並みの女の子らしくよそおい、巷の雑沓の中ではバッヂがなければそれと気付かない — というのがまず嬉しい。

古く鹿鳴館のころは、先輩諸姉の服装が満天下の女性の流行をリードしたものときかさね、そのおもかげは図書館所蔵の写真にうかがうことができるが、私の在学時代との大断層は一体いつできたのであろうか。“冬は黒・紺又は茶のスーツ、白ブラウス、夏は白の長袖ブラウス、必ずストッキング着用のこと。髪は新髪、お下げは不可。束髪のこと。”というのが当時のきまりで、昭和18年といえども戦時中であつたがこの程度の洋服の新調はまだ出来たらしい。洋服はともかく問題なのは束髪で、左右 $\frac{1}{5}$ ずつをねじって真中によせ、残りの $\frac{3}{5}$ をそれにまきつけてピンでとめるのが典型的なスタイルであつたが、私は不器用なのかどうしても出来ず、二つにわけて丁度みずらのような頭にしていた。これらが所謂失恋鬘で、神保町でも銀座でも女高師の生徒の存在がたちまち目にとびこんで来るのは、どうやらこの頭のせいが多分にあつたようである。皆この頭がいやで生徒主事に“先生にもお嬢様がいらっしゃるでしょう。”などと筋違いなことを云って談じこんだ人もあつたが、いつもいなされてしまって、不承不承奇怪な頭をしていた。その中戦争の進展と共に服装はモンベと防空頭巾一色になって、まわり中がそうだったから別に異和感も感ぜずに終戦になってしまった。戦後はよきも悪きも古きものを切りすててしまったが、いくら自由になったとい

っても肝心の物がなかったから、皆戦時中と五十歩百歩の服装であった。完全に捨て去ったのは失恋鬘で、我も我もときそってパーマをかけた。

昭和24年お茶の水女子大学の第一回生を迎えて入学式が行われたが、地理学科の中に真赤なワンピースをきた学生がいて、少し大げさに云えば息が止まりそうにおどろき、つくづく“女高師は遠くなりけり”と思ったことであった。この学生は卒業後ずっとさる出版社につとめ、社内きつてのベストドレッサーであるそうなの。

このごろ感じたことなど

別 技 篤 彦

今年の春休み、私はホノルルでこんな経験をした。ホテルの一階にはたくさんの店が並んでいたが、そのなかに食料品店があり、その女主人は明らかに東洋系の顔だちをしているが日系人ではない。聞いてみるとフィリピン系の人であった。私はよくそこへよって果物やジュースを買ったものである。ある夜もその店にいと、派手な真赤なムームーを着た若い日本人の女性がとびこんできた。昨日あたりから旅行社の団体できている新婚組の一人にちがいない。彼女は女主人をみるなり、いきなり“おばさん おビール一本ちょうだい。”といったものだ。女主人は日本語が判らないのでキョトンとしている。日本人の花嫁さんはじれったそうにまたいった。“おビール。主人が部屋で待っているのよ。早くしてよ。”私は彼女に注意してやった。すると彼女は興ざめた顔をして、“なあんだ。ここハワイでしょ。日本語が判らないなんて呆れた人ね。”これには恐れ入った。ハワイはどこでも日本語が通じますなどと書いてある観光案内書にも罪があるが、花嫁さんはいったいどこの国に来ていると思っているのだろうか。“日本国ハワイ県。”という意識があるのだろうか。

× × × ×

私は講義その他いろいろな機会に東南アジアやインドその他のアジア諸地域の農民の考え方、その生活を支配している民間信仰や呪術、アニミズム的観念などのことを話す。そして感想をきくと、“とても信じられない。”という返事がかえてくる。私がウソ八百を並べているとでも思っているのだろうか。それでなければ、どうせ土人の低級な考え方と、と軽蔑して問題にもしないらしく見える。伝統的な価値体系をたゞ無視し、破壊することこそ進歩した近代文明化だと信じている今の